

里山グループ

池山 良武

◆ 作業中に思うこと

山班の仕事は、何人かのグループに分かれて作業をすることが多い。その中でわいわい話しながらの作業も楽しいが、草刈作業だけはエンジン音もあって、半日くらいを無言で過ごすことも多い。けれどもそんなときにいろいろなことに思いを巡らせ考えていると孤独どころか、目に見えぬ、かつての里山の人々と親しく会話をしているような気になる時があり、楽しいものである。

先月の活動日に、杉林の下草刈りをしている折、といっても背の高い笹やつる草、低木などで踏入る余地もない箇所や深み、水たまりもあり、歩くことさえ困難なところもあるが、そんな地面が全体的に妙に波打っていることにも気付いた。多分この所は5、60年前までは名も知れない人とその家族らによって、一畝一畝、耕され、周りの山林からは薪炭を得て、生活していたのだろうと想像する。「この地は私たち、ならやまプロジェクトのメンバーによって受け継がれ、私は今、刈払機でこの所を生かそうと作業をしています。」

まるで祖先の墓の前で話しかけているようで実にご気持ちが落ち着き、癒やされる瞬間でもあった。

主のすみかはどこにあったのか。物的資源は身近にあったのか。この地を生活の基盤としていた人たちは、それなりの知恵と適応力でこの里山をごく自然に守り、暮らしてきたのだろう。

「ならやまプロジェクト」のメンバーには、環境を基盤とした今日的里山を築かねばという使命感で活動する人、レクリエーション・健康目的で参加する人などさまざまで良いが、今日的里山形成にはメンバーの知的総力の結集を図らねば単なるファミリー農園になってしまうのではないかと思う。都会暮らししか、経験したことのない世代が将来この里山を継承していく日は近い。その時、道を間違えると的外れの里山「老人の遊び場」と化していないか。杞憂となれば良いが。



エコファームグループ

岡田 安弘

◆ 手のかからぬ イタリアン・トマト

バスを降りて、竹林をくぐると「スズメバチに注意」の立て札。向こうに里地、里山が広がる。初めてベースキャンプを訪れた、1年半前のことだ。赤い小玉の実る枝を束ねる女性に尋ねた。会員が持ち帰れるようにハナナスを収穫していると知る。

日ごろ食べる野菜はともかく、活動を重ねる度に知らぬ野菜に出会う。サトイモは最上川の一家相伝「甚五エ門芋」だそうだ。佐保台小学校で開く自然教室では、ジュズダマに初にお目にかかるといった具合で名前をメモする日が続く。

とうとう、この欄に書く当番が回ってきた。何を書いても皆さんにとっては常識だろうと思うと、書くことがない。困り抜いて、イタリアン・トマトの栽培体験を話すことにする。

ならやまの活動に参加する半年前、自宅近くの貸し農園に空きができたので、友人が「これなら手間がかからず失敗もないし、ワインにも合うよ」とイタリアン・トマトの苗、シシリアンルージュ、アマルフィ、ロツアモーレ、サンマルツアーノの4種を届けてくれた。

サンマルツアーノは、わき芽がたくさん発生するが、下部のわき芽を摘む以外は放置するようと言われていた。本当に手間いらずだった。支柱のてっぺんを越すほど高々と茂り、親指大、ラグビーボール型が無数に実る。味はいまいちで、トマトソースにする。

シシリアンルージュは丸型のミニ。2分の1に切り、大きなザルに並べること3回。塩をふって天日にさらすこと4日。直径1cm 余りの乾燥果実の出来上がり。真夏の日光をいっぱい吸い、体に良さそうな気がする。他の2種はミニと中玉。味は国産トマトにはかなわないので、ほとんどジャムにする。トマトソースとジャムは、知人が運営する「こども食堂」で役立ててもらった。わき目もふらず、いや違う、わき芽もとらずに放置。ずばらな自分にぴったりの畑作だった。



景観グループ

山中 笙子

◆二十四節気と春の訪れ

1年でも一番寒い大寒(1/20)を迎えると節気を意識する。西池辺りや畑に降る霜や冷たい風、作業中の指も寒さで痺れる。が、半月後の立春(2/4)を知ると辛抱できる。冬至から徐々に日が長くなり大地が暖められ春の兆しを感じ、生き物は準備を始める。万物が発(は)る、草木が張るは春の語源。春告鳥のウグイスも地鳴きから「ケキョ、ケキョ」に変わり始めた。目につくのは白梅、椿、スイセンの花。とは言え2月はまだまだ寒さ厳しく、花班は霜囲い、寒肥やりの作業をする。

雨水(2/19) 降る雪が雨に変わり、積もった雪は解け流れ出し空気や大地が緩み潤って草木の芽が出始める。言葉の如く本当によく雨が降り、春に3日の晴れなし。春の兆しから春の気配へと変化。道端でスマレを見つけ、ホトケノザ、オオイヌノフグリ、タンポポが陽に輝く。一方、気圧配置の変化による春の嵐、春1番も吹き不安定な天気。

啓蟄(3/6) 暖かい気配を感じ虫が蠢く。植物の若芽や蕾の先が色づく。昔の人は花咲くことを笑うと書いたらしい、花を眺める人も笑顔。ならやまの菜の花に小蜂が飛び交い、沈丁花の香り、ムラサキハナナ、スノードロップの花を楽しみながら霜囲い撤去、施肥、柵の作り替え等を行う。

春分(3/21) 気温が上昇し花が

次々と咲き乱れ春爛漫。春の錦、芳春、花曇り、春愁、おぼろ月夜、春雷、花散らし、と多くの言葉が

この季節を表す。カキドオシ、カラスノエンドウ、チューリップ、ユキヤナギ、レンギョウ、桜が幸せをくれる。仲間誘われて、ならやま大通りへの階段を登り上から眺めるならやまの風景は、少し霞がかかり春うらら、美しい!

二十四節気は季節の移ろいを事前に示し、自然をより深く知り、人の心を温かく柔らげ、喜びをくれる。自然に対し畏敬の念と感謝を思う。4月の青葉の候の清明(4/5)、恵みの雨の穀雨(4/20)が、少しずつ夏へと季節の変化を教えてくれる。



里山の今

鳥シリーズ

小田 久美子

◆天才 仰天 「蛇口カラス」

日本カラス研究の第一人者、樋口広芳東大名誉教授のカラスの研究論文がイギリスの鳥類専門誌「ブリティッシュ・バーズ」に発表され世界が大変驚き報じていました。



そのカラスが目撃されたのは、横浜市の弘明寺公園水飲み場のカラスです。人が使い易くデザインされた三角状の蛇口のハンドルを少し回して水を飲み、更にもう少し回して水浴びをしています。この姿は公園を散歩する人たちには数年前から目撃され有名カラスだったようです。恐らく公園に來た人間の行動を観察し、理解しての行動だと思われます。ニューカレドニアのカラスが道具を使って木の中にいる幼虫を食べる事は1996年の論文で有名で、賢い生き物だという事は周知の事でした。

券売機でキップを買うカラスが賢い・可愛いと評判になったと昨年7月号に書きましたが、これは恐らく飼育下のカラスで、人の言葉を理解していたのだと思われますが、このカラスは野生のカラスなのです。近くに川もある環境なのになぜなのか、教授は目撃の時期に注目。恐らく子育ての時期で、巣からあまり遠くへ行きたくないからではないかと推測しています。

一見こわもてのカラスも黒目勝ちなつぶらな瞳。羽色はカラスの濡れ羽色が真黒のように見えますが、よく見るとメタリックな青い色が見えます。

『万葉集』には 12-3095 作者不詳

朝鳥 早くな鳴きそ 我が背子が

朝明の姿 見れば悲しも

(鳥よ そんなに早くから鳴かないでくれ

あの方の 夜明けに帰られるお姿を 見るのはつらいから) 他、3首が載っています。



春分